
Unchain

弓張下弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

U n c h a i n

【Nコード】

N 4 3 3 6 Y

【作者名】

弓張下弦

【あらすじ】

誰からも見捨てられ、また自分からも心のそこから憎んでいる少年がいた。故に力をつけ身を守り、それが人との距離にさらに溝を刻んだ。そんな彼に火を灯したのはある偶然から生まれた出会いだった。

「貴方の傍が一番落ち着くんです」と小さな女の子が言った。

「お前となら安心していけそうだ」と少女が言った。

2人がいたから少年は、その2人を守るために世界に刃向かった。

プロローグ 黒い空にて

黒い空だった。

どこまでも、どこまでも黒い世界。ひとたび見ればその苦しみが胸に渦巻き、果てしない虚無感が心を襲う。それぐらい、闇に染まった空だった。星の光は微々たるもので、あるのはただ1つ燦爛と輝く臥待月のみだ。

だが、その月の光さえ届かない場所がある。吹き抜ける風は強く冷たく、どこかすえた匂いが漂っている。鼠が走り回り、鳥が空で鳴くような、そんな場所。

そんな世界の下、足音を鳴らすものがいた。

黒いコートに黒のジーンズ。まるで周りの風景を意識したかのように溶け込んだ服装である。背が高く、どこか達観した様子のあった少年だ。自然と分けられた髪はこれも闇に溶けるように、黒い。それだけならまだ、どこにでもいる少年と同じだった。

が、彼の顔の半分は、赤黒い色に染められていた。

顔だけではない。光に照らされれば分かるだろう。黒のコートも、ジーンズも、左袖とポケットの間からわずかに覗ける手甲も元の色を奪われ紅く塗り替えられている。さながら、ペンキでも前からぶっかけられたかのようなだ。

だが、近くに寄ればその臭いが鉄くさいと分かるものだった。

少年は口を一字に引き締め、目をつぶって考えるかのように暗い隘路を歩いて行く。臭いに引き寄せられた鼠を無視して、ただ真っ直ぐ進んでいく。

紅く染まったその服から、鉄のさびのような気を悪くする臭いが鼻についても伊月は全く意に介さない。

彼にとって、それは既に慣れたものだから。

――ア

ふと、かすかな声が耳に入り、少年は立ち止まった。

「……？」

こんなところで声などするはずがない。人が本来使うべきではない道なのだから。少年は閉じていた目を開いて、音源を確認しようとして先に進んだ。

視界に飛び込んだきたのはゴミ捨て場だった。どこかの飲食店が纏めて捨てたのだろう、青いゴミ袋が大量に捨てられており、いくつも袋が破けて烏や鼠がそれをついたり啄んだりしていた。においも少年が顔をしかめるぐらい、臭い。

しかし……。

「……人？」

そのぼやけた輪郭から、人らしいものが横たわっているようだった。訝しみながらも確認するために近づいた少年はその姿を見て息を呑んだ。

それは少女だった。小柄で幼い、見た目だけでは12歳ぐらいかと思われる女の子。だが、その髪の毛は見た者の心を奪うほどに美しい銀色だった。いくらか汚れているものの、それでも銀と呼ばれるほどの輝きを持つ髪は力なく少女の体にかかっていた。

小さな顔はとても愛らしい。もしこれが汚れていなく、かつ苦しげな表情に支配されていなければ誰にも負けない容姿だったのだろう。

体もやつれ、見るからに力はない。放っておけば数日で死ぬだろう。

着ている服は白いドレスだった。それも現代のようなドレスではなく、少し時代のずれた、例えるならば数百年前の外国で着ているようなドレスだった。そのドレスも、ゴミにまみれたせいで黒くすくけているが。

「——さ、ま」

声の主は彼女で間違いないようだ。悪夢を見ているかのように苦悶の表情を浮かべている顔、その口からそんな言葉が漏れてくる。

どうも、まともな事情のある子でもないらしい。

今の時勢、そんな子供などいくらでもいる。少年自身、何度も見てきた。少年は何も見なかったことにして、引き返そうとした。

「——とお、さま」

しかし、その声に少年は思わず首だけ振り返った。

見れば、瞼を半分開いた少女が少年に向かって手を伸ばしていた。その目に生氣は映らない。おそらく少年の姿も臍にしか見えていないだろう。言葉を聞く限り、どうも少年を父親と間違えているようだった。

だけど、その姿は助けを乞うみたいで。

少女を少年は照らし合わせていた。数年前、同じことを願ったあゝる1人の少年と。

その少年は味方のいない世界で、助けを求めて手を伸ばした。だが、結局誰も手を掴む人はおらず、振り払われ続けた。やがてその少年は世界を憎みだし、1人で生きることを決意した。

そんなことが出来る人は少ない。そして、目の前の少女は無理だと確信した。

「……」

少年は一度首を左右に振り、体の向きを変えた。

そして、ゆっくりと歩いてゴミ置き場にいる銀髪の少女の前に立つ。

伸ばされていた手を、掴む。

「……同じ、か」

かつての自分と、同じだ。

そんな境遇に置かれた少女を、どうして見捨てることが出来るようか。

少年はその小さな手を胸に引き寄せて、小さく儂き少女を抱きしめた。少女は虚な目をしたまま彼の胸の中にすっぽり収まった。

冷たい風が渦巻く路地裏。光さえも阻まれた灰色の世界には温かいものなどあるわけがない。

しかしただ、彼の周りだけは温かさがあつた。

プロローグ 黒い空にて（後書き）

初めまして弓張下弦と申します。処女作、というわけでもないのですがこちらに投稿するのは初めてなのでどうかよろしく願います。

1話 負を纏った少年（1）

それは昼頃のことだった。

昼休みに入り、北城伊月は昼食を買いに校舎の外へ出ていた。学園内にも食堂はあるが、どうも伊月はそこが居心地悪いと感じていたからだ。そこでお目当ての物を無事購入し、来た道をゆつくりと引き返していた。

そして中庭を横切ろうと進み、ようやく突っ切れるといったところで風景の違和感に気づいたのだった。

視界がぼやけていた。

まるでもやのかかったような感じた。しかし、今は昼。霜月の寒さをもつてしても昼に水分が露点を下回る事などありえない。

「……結界」

伊月は呟き、ちょうど中庭の端に当たる空間に手を伸ばす。予想通り、何もなければずの空間から硬質な抵抗感を覚えた。どれだけ押し込もうと、それ以上進むことはなかった。

結界には2つの種類がある。1つが結界内にいる者に何らかの影響を与えるもの、もう1つはただ閉じ込めるだけに適したもの。今回は後者のようだ。

閉じ込められたと察するも、伊月にそれほど動揺はない。いちいち動揺などしてたら咄嗟の判断が追いつかなくなる。

「……ッ」

空気を裂くわずかな気配を感じ、伊月が地面を蹴って後ろに下がる。瞬間、カカッ！ と小気味よい音を立てて青白い物体が伊月のいた場所へ連続して突き刺さっていた。

半透明で、どこか冷たさを感じさせるその物体は、氷柱だった。

「ああ？ 避けちゃうの？ めんどくせえ」

伊月は眉をしかめて、飛んできた方向を振り向いた。

もやの向こう、そこに長身の男が立っていた。髪を金色に染め、

制服を着崩したちゃらい奴だ。同じ学園の制服を着ていて、胸元のエンブレムの青色を見るに3年生のようだ。ちなみに伊月は1年生である。

伊月は彼を知っている。というより、学園にいるなら知らない人は少ないだろう。それぐらいの有名人が目の前にいた。

「……なんだ」

そして、心底煩わしそうにため息をついた。

日比野蒼弥。この学園では氷系魔術師筆頭と言われている。

魔術養成学校である日本第一魔術学園。魔術を専門的に学ぶ学校の中で最高峰と呼ばれているこの学園は生徒間でランキングをつけている。競うことが個人の能力を高めるに適しているからだ。

で、目の前にいる日比野は氷系魔術でトップ、全体でも上位の実力を持っている。氷系は水系の派生であるためにそこまで人がいるわけでもないが、強い御方なのは確か。

だからといって敬意を持てとか、そういうルールはない。

だがそんな態度は上級生にいいものではない。事実、日比野はこめかみをひくつかせていた。

「お前、俺が誰だか分かっているのかあ？」

「……うるせえ」

まともにとりあう気など、伊月にはなかった。

日比野を嫌う生徒は多い。それは彼がとてつもなく傲慢で自己中心主義であるからだ。氷系魔術師筆頭という肩書きを得て、どこか自分が最も上にいるような傲岸不遜の態度を取っている。いくらルックスがまあまあといえ、誰もそんな奴を好きになれるはずがない。

「……で、何の真似だ」

「ふん。お前の妹がさ、俺がせっかく告白したというのに興味ないってふりやがったからな。腹いせだ。兄のお前をばこぼこにすればあいつのプライドもずたずたになるだろうしなあ」

「……しょうもねー人」

言葉を日比野に叩きつけ、伊月は自分の妹に対して肩をすくめた。

同学年である伊月の妹はいろんな意味で学園では有名である。かなりの美少女であることや、学園でトップの実力を持っているなど、肩書きなど上げればいくらでもある。だからこそ、彼女に恋い焦がれる人も多いとは伊月も知っている。

だが、3年生が1年生を口説きに行くとか馬鹿らしいし、そもそもその妹は日比野みたいな奴を相手にするはずがない。そして、そのツケを兄に回すのも低脳の考えだ。

「自分の性格を鑑みとけよ、馬鹿」

「んな……！？ てめえただじゃすません！」

怒りに声を荒げ、日比野は片手を天に掲げる。伊月は短気も追加、と彼の欠点リストに1つ付け加えながら足幅を広げた。

「水よ我が手元に集え！ 故に取る形は鋭利な茨！」

日比野の掲げる手に淡い蒼の光が集まっていく。その光はだんだんと膨らんでいき、ついに三角錐状の蒼氷となって具現化した。

（水の茨……下級魔術のあれか）

魔術の行使には詠唱が必要だ。まずどの元素を扱うかを宣言し、その形を言葉で具体化させる。そうやって概念が固定化され、名前を呼ぶことで初めて魔術は発動するのだ。唯1人、それが必要なしで発動できる奴もいるが。この作業が必須の魔術は固定魔術と呼ばれている。もちろん対もある。それは自らが考え出した独自魔術のことだ。

伊月は日比野が発動しようとしている魔術を知っている。さつき、伊月を狙って発射された魔術の氷柱だ。名を……。

アイス・ニードル
「氷針！」

大きく張り上げた声と共に、日比野が手を振り下ろした。同時、その手に集まっていた3本の氷柱が一斉に伊月に向かって襲いかかる。

弓が放つ矢よりは遅く、人が投げるボールよりは断然早い。そんな氷柱が迫ってくるにもかかわらず、伊月は至って冷静だ。

軽く、頭を振る。

氷柱はそれだけで目標を失い、伊月の肩の上を通り過ぎていく。後ろでさくつと音がした。地面に鋭く入り、刺されば致命傷になることを知らせる音だが、伊月は平然と立っている。

「なっ……」

むしろ、放った側の日比野のほうが動揺していた。確かに<氷針>は目で捉えられるほどの速度だが、同時に避けがたいものでもあるのだ。ましてや体を大きくずらすのではなくただ頭を振るだけ。どこに飛ぶかを正確に察知してないと出来ない芸当だ。

しかもその相手の顔に恐れがない。本来ならば魔術はとても恐れるべきはずなのに。

相手が呆けている間に伊月は地面を蹴り、日比野へ向かって走り出した。明らかに無防備なその体に手甲をはめた左手を叩きつける。

「ぐっ、我が身を守れ、氷盾！」
アイス・シルド

最初の元素を特定する詠唱は、一度唱えたらもう一度唱える必要はないのだ。別元素を唱える場合は別である。

一瞬の内に生成された三角形の氷の盾と伊月の拳がぶつかった。ガキツと耳障りの音を立てて氷の盾がわずかに押される。だが、破壊されることはなかった。魔術で作った盾はそれほど強力な物なのだ。

「うらあ！」

日比野はその盾を思いつき蹴りつけた。

「……！」

まさかそういう攻撃に出るとは思わなかった伊月。拳を盾と密着させたまま思わぬ反動を食らい、何歩かよろめく。

「取る形は鋭利な茨！」

その好機を逃すまいと日比野は啖呵を切るように<氷柱>の詠唱を始める。術自体は単純なためそこまで怖いものではない。

だが、手のひらに集まる氷柱を見て体勢を立て直した伊月は眉をひそめる。今度は数が多い。数える辺りで10はありそうだ。

「次は避けられねえぞ！
アイス・ニードル 氷針！」

魔術名を叫び、氷柱が動き出す。

体を貫かんと牙を剥く鋭利な10の氷柱に、伊月は一瞬で避けきれないと判断した。体勢を崩されたせいで逃げる時間を逃した。その上、一步で動ける範囲に必ず1つは氷柱が来る射程となっていた。ならば。

「……壊すまで」

飛来する氷柱のうち、真っ直ぐ自分へ飛んでくる2つのそれに狙いを定める。

そして、伊月は自ら氷柱のほうへ足を踏み込んだ。普通の人が見たら、誰もが死に急ぐような行為だと思うだろう。

だが伊月は止まらない。踏み込んだ足に流れるような動作で腕を体いっばいに引き絞る。そして己を狙う2つの氷柱を、伊月は同時に裏拳で叩いた。

ガシャン！ とガラスの碎け散るような音が美しく響いて、氷柱が木っ端微塵に砕かれた。氷柱の破片はゆっくりと空中を落下し、地面に落ちて、消えた。

「……ちっ」

しかしその余韻に浸ることなく、伊月は舌打ちをして真横に走り出す。

なぜなら、日比野が<氷針>を放った直後に再び詠唱をし出すところを見てしまったからだ。風に流れて聞こえてきた詠唱は長く、それが今終わろうとしている。

危険なものが来るのは確実だった。

「——抗う者を蒼氷の檻へ！ フロスト・プリズン 氷瀑牢！」

（……そっちか）

小さく悪態をつく。

刹那、パキン！ と空気の水分が瞬時に凍結した。

全長2メートルほどの大きな氷塊が突然生まれ、その中心に伊月は閉じ込められていた。身動きがとれず、常に肌に氷を乗せたような冷たさが全身を襲う。

字の通り、氷の牢獄だ。

「……たく。手こずらせやがって」

日比野は氷塊の元へと近づき、睨み上げる。

氷塊に幽閉された伊月は恐怖も動揺もなく、何とも思っていない表情をしていた。その顔がさらに癪に障る。

「もともと俺はお前みたいな能無しがいるのがめちゃくちゃ気に入らねえ」

突如、ピシツと氷塊に亀裂が入る。その亀裂は徐々に広がりをおおきくし、やがて縦横無尽に走り抜ける。

そして、ガシャァン！ とシャンデリアを砕いたが如く大きな音を響かせ、どこまでも巨大な氷塊が砕け散った。

伊月は解放された牢屋から糸の切れた操り人形のように地面に投げ出された。ぴくりとも動かないその姿は死を連想させる。

日比野はその頭をガシツと踏みつけ、ぐりぐりと地面に押しつけた。

「魔術も使えねえ出来損ないが、でしゃばってんじゃねえ、よ！」

日比野にどれだけ踏みにじられようと、伊月は体を動かさない。

気絶しているのか、それを装っているだけか。もしかすると本当に死んでいるのかもしれない。それだったら日比野にとって好都合なのだが。

「何もできねえ奴はただ泣いてすがってればいいんだよ！ それをためえという奴は余裕な態度でいやがって。うぜえに決まってるおが！？」

最後に強く踏みつけて、日比野は伊月から距離を置いた。ごりつと骨を削るような音がするが、それでも伊月は起き上がらない。

「……あゝあ。無駄な時間を過ごしたなあ」

彼に背を向けて、退屈そうに歩いて行く。その姿は実にすきだらけだった。

どうも伊月が起き上がらないのを気絶したからだと思ったようだが、違う。実際は五感がちゃんと働いていた。

だから、その時に呟いた日比野の言葉を、伊月は聞き逃さなかった。

「生きている価値がねえ屑はそこで這いつくばってる」
聞いた瞬間、伊月の思考は急速に固まった。

もやもやしていたものが一気に形作り、真っ黒く染め上げていく。ゆらり、とまるで亡霊のように伊月は立ち上がった。頭は垂れて、腕はだらんと下げている。だが、足はしっかりと地面に根付いていた。

「日比野先輩！」

そこで、第三者の声が結界に響いた。

「……皐月ちゃん？ 応援してきてくれたのかな？」

見れば、髪をストレートに下ろした少女が口に手を添えて叫んでいた。日比野が先刻告白して取り合いもされなかった少女だった。先ほどふられたというのに、日比野は見当違いな考えをする。

もちろん皐月という少女はそれが目的ではない。

必死の表情で、懸命に届かせようと声を張り上げていた。

「逃げてください！ 早くしないと——死にますよ!？」

「は？ 何を言ってる——」

刹那、じやらんという金属音が鳴り響いた。

1話 負を纏った少年(1) (後書き)

早速戦闘に入りました。上手く書けているか正直不安ですw

2話 負を纏った少年(2)

「兄さんと日比野先輩が戦っている!？」

廊下を凜とした声が駆け抜けた。

制服から覗く肌は白く、だが不健康そうというわけではない。すらりと細い体型をして、絵から出てきたかと思うくらい整った顔立ち、さらに濡烏色の髪が背中までストレートに流れる美少女である。いつもなら冷めているという目は、今は驚きに目を見開いている。腰には鞘と学園用の模擬刀が差されていた。

少女の名前は北城皐月。学園のトップの実力者であるとともに最下位の北城伊月の妹である。

皐月は自分らしくない大きな声に遅くも口を押さえ、もう一度、確認のために聞き直した。

「……それほんと？　嘘じゃないでしょうね？」

「……それだったらこんなに息切らしてここまでこないって」

皐月の目の前には、ぜえぜえと荒い息で膝に手をつく少女がいる。

赤の混じった黒髪をサイドに纏め、少し高校生というには幼すぎるように見られる身長や童顔をした少女——六名神楽は皐月を上目遣いに見ながら口を開いた。

「仕掛けたのは日比野先輩のようだけだね。伊月君は中庭にいたところを結界ではめられたっばい」

「あの先輩無断で使ったの？」

皐月の言葉に神楽は頷いた。

結界の発動は専用の道具で発動出来る。しかしそれは乱用を防ぐため教員が持っているのだ。結界は本来魔術が無駄に人やものを傷つけないようにするためにあるものだが、付属効果として相手を結界内に閉じ込めることが出来る。それを利用して相手を束縛したり、逃げられない状況にして決闘に持ち込むのを防ぐためだ。

だが、例外はいるのだ。

「日比野先輩は風紀委員だからね」

神楽は理解しつつも納得のいかない表情をした。それは皐月も同じだった。

この学園の場合、風紀委員は学校生活の指導の他、無闇に魔術を使う生徒を取り締まるために結界を張ることを許可されている。

よもや、その取り締まる側が乱用するとは学校側も思うまい。そんな先輩に言い寄られたと思うと、皐月は大きくげんなりした。

「後で告げ口しておきましょう。それよりその試合早く止めないと」「そんなに兄が心配？」

神楽が妙ににやにやしながら皐月に尋ねる。そこまで兄と氷系魔術師筆頭の戦いを阻止しようとするあたり、勘ぐりをしないわけにはいかない。

それを冷静な目で返して、皐月は思いがけないことを言った。

「兄さん？ そっちじゃなくて日比野先輩のほうが心配だわ」

「……え？」

耳に入った言葉に神楽は数秒固まり、ぎこちなく言葉を返す。

「え、で、でも伊月君は魔術が使える——」

「言わないで」

ぴしゃりと言葉尻を断つように皐月は言い放つ。

その目はいつもの冷たさを増し、まるで氷に触れたかのような怖気が立っていくのを神楽は感じた。

「例えあなたでも兄さんを侮辱するのは許さない」

有無を言わせぬ凜とした声に、神楽は黙るしかなかった。もしここで反論でもしたら間違はなく刀で真つ二つになる。

だが、神楽が言わんとしていたことは事実だ。

伊月は魔術は使えない。老若男女問わず人間だったら誰でも魔術が使えるというのに、おそらく世界で唯一人魔術を使うことが出来ない人間だった。

それはある体の部分が影響している。魔術の源である魔力は空気

に混ざっていて、それを取り込むのは呼吸と同じである。つまり魔力は口で吸って肺で吸収しているのだ。そのために肺には『魔胞』と呼ばれる呼吸で入った酸素と魔力を体内に留めるものがある。

伊月にはそれが無い。

なので、彼の場合は空気を吸っても酸素しか取り込めない。故に魔術を練るための魔力が存在しないので結果的に魔術を使えないのだ。

だから、魔術を使えない人間と魔術に関して上位の人間。どちらが勝つかは目に見えている。そのために神楽は伊月が負けることを心配したのだ。

だから彼女は、皐月が魔術師筆頭を心配するのを疑問に思っただ。

「……行くわよ」

「あ、待つて！」

考えている間に皐月は歩き出してしまっ。女としては大きい歩幅に神楽は小さい歩幅で何とか横に並んだ。

「ねえ、どうして日比野先輩の心配を？」

「心配じゃないわ。あんな人に好かれていたって思うだけで気持ち悪いわよ」

つばを吐くように皐月の冷めた口から吐かれる言葉に神楽は全く持つて同意する。自分だってあんなナルシストに好かれたくはない。

「心配じゃなくて、身を案じているだけよ」

「それって同じことでは？」

「……何も知らなければそう思うわね」

皐月は無表情のまま、歩を進める。気づけばそれは急ぎ足になっていた。

「魔術が使えない。それってこの世界の恥よね。だったら周りの人はどう思う？」

いきなり何の話かと神楽は思っ。それでもちゃんと答えた。

「……蔑み、侮る。腫れ物のように扱い、自分より格下と思ひ込む」
「そういうこと。だから兄さんも同じ扱いを受けてきた。そして今

も受けている」

妹の立場から見てきたからわかる。伊月は『魔胞』がないと判断された日から家族の誰からも避けられ、見れば侮蔑の言葉をぶつけられた。

それは外に出ても同じ。知り合いは揃って出来損ないと言い、知らない人でもその姿を知られるなりすぐに疎まれる。石を投げられたこともあるらしい。

この学園に入っても、魔術が使えないくせに入ったと上からは目をつけられ、クラスメイトからは見放された。直接言う者はいないものの、陰口をたたく人間はそこら中にいた。

「その本人は心を冷やし、静かに復讐の念を燃やすようになった。その復讐に一番いい方法って何だと思う？」

「……」

すぐには思い浮かばず、神楽は黙ったまま足を動かす。皐月は無意識に顔にかかっていた髪を払うと答えを言った。

「強くなること。強くなってその人達を見返すこと。それだけよ」

皐月はそう言って、いつの間にか着いていた下駄箱に駆け寄って靴を履き替えるなりすぐさま飛び出してしまった。神楽も慌ててその後に続いていく。

「うわぁ……」

「……」

玄関と中庭は直接繋がっている。中庭に出てきた2人は、その目に飛び込んできた光景に声が出なかった。

中庭には騒ぎを聞きつけたか多くの野次馬が集まっていた。その人達が囲む内側に半透明の膜のようなものがある。これが結界だ。さらにその内側はもやのようなものが立ちこめて、その中央には大きな氷の塊があった。

フロスト・プリズン

皐月はこの術を知っている。氷瀑牢といい、対象を中心とした巨大な氷塊を作り出して閉じ込めるという回避不可能の術だ。だから氷塊の中央に目を凝らせば、予想通りの人物がいた。まるで走っ

ていたかのように左腕を背中後ろに突き出し、右手は白のテーピングを巻き、左手は手甲をはめていた。驚くでもなく恐れるでもないただの無表情の、氷付けにされた伊月の姿がそこにあった。

「もともと俺はお前みたいな能無しがいるのがめっちゃくちや氣にくわねえ」

それを下から忌々しそうに見上げている金髪の少年。皐月と神楽はそれが日比野だとすぐに分かった。

その時、ぴしりと氷の表面に亀裂が入った。その亀裂は瞬く間に四方八方へと走り抜け、氷塊の形を維持できなくなって、幻想的な音と共に自壊した。

フロスト・プリズン

<氷瀑牢>はいつまでもその形を保っていられる魔術ではない。数十秒もするとその表面に亀裂が入り、瞬く間に砕け散る。

伊月は氷の牢から解放され、投げ出されたぬいぐるみのようにぽとりと地面に落ちた。

「彼、大丈夫？」

「痛みは純粹に受けたと思うわ」

フロスト・プリズン

<氷瀑牢>が砕けた拍子に突きつけられる痛みは非常に大きい。実際に傷はつかないものの、まるで体の部分を持って行かれるかのような痛みを味わうのだ。

無論、それは伊月も同じ。普通だったら泣き叫び、もがき苦しむ痛みというのに彼の場合は倒れたただだった。

その頭を、日比野ががしりと踏みつける。

「あつ……！」

「……」

神楽が反射的に声を上げ、皐月は眉をわずかばかりつり上げる。2人の目には、弱い者いじめというべき光景が映っていた。

「魔術も使えねえ出来損ないが、でしゃばってんじゃねえ、よ！」

そして、何度も何度も、まるで地面に埋め込むかのように伊月の頭を踏みつける。男の足で踏みつけられるのだから相当痛いはずなのに、伊月は無言でそれを受けている。氣絶しているのだろうか。

周りは無言の者もいればもつとやれと野次を飛ばしている者もある。前者は止めようとは思わない見て見ぬ振り。後者は伊月のことを嫌う人か場に流されて飛ばす人か。

伊月を擁護する者など、どこにもいない。

「何もできねえ奴はただ泣いてすがつてればいいんだよ！ それをためえという奴は余裕な態度でいやがつて。うぜえに決まってる！？」

最後、一際強く日比野は伊月を踏みつけた。ごりつ、と音と共に伊月の顔が沈み、足を話した頃には顔が地面にめり込んでいた。だがそれでも、彼は動かない。

死体のような伊月を尻目に、日比野は背を向けたまま。まるで余裕を見せるかのように言う。　「生きている価値がねえ屑はそこで這いつくばってる」

「……ッ！」

皐月はその時こそ心臓を鷲づかみにされたかのように固まった。兄を貶されたから、とかそういう反感の類のものではない。

皐月が感じたのは、恐れ。

兄にとってその言葉は最も聞きたくないことで、同時に聞かせてはいけないこと。

ぴくり、と彼の体が動く。

そして手を大地に着け、のそりと起き上がった。

腕はぶらぶらで、頭も下げたまま。服も泥にまみれて、見窄らしい。だがしつかり足は地面につけている。誰もがあの強力な魔術を受けてなお立ち上がることに驚きを隠せないようだが、それ以上に伊月の雰囲気にも誰もが息を呑んでいた。

黒い。

彼の周りだけまるで光を拒絶したかのように、どす黒い雰囲気立ちこめていた。

ぞくりと鳥肌が粟立つ。身の危険なるものを彼から感じ取った皐月は、咄嗟に未だ気づいていない先輩に向かって叫んだ。

「日比野先輩！」

だが、振り向いた先輩は自分を見てだらしない顔をさらけ出すしかなかった。後ろのことに全く気づいていない。自分しか見えてないのが彼の一番の汚点だ。

「……皐月ちゃん？ 応援しにきてくれたのかな？」

その時皐月は日比野の後ろを見ていた。

伊月は焦点を確実にずらした目で日比野を見ていた。その姿は亡霊を見ているかのようなうだ。伊月はテーピングを巻いた右手を、左裾の中へ突っ込んだ。

「……まずい」

「え？」

皐月は呟き、神楽はそれに反応する。しかし皐月は返すことなく、日比野に切羽詰まった声でさらに叫んだ。

「逃げてください！ 早くしないと——死にますよ！？」

「は？ 何を言って……」

ようやく彼は振り返り伊月を視野に入れた。だが、遅かった。

じやらんと金属のこすれるような音が辺りに響く。その音源は、紛うことなき伊月が裾から引っ張り出したものだった。

それは鎖だった。腕の長さの2倍ほどはある鎖で、先にはおもりとなる長細い鉄の塊がついている。装飾など何もない、無骨な鉄鎖だ。だが知っている人ならばこの鎖をこう呼ぶのだろう。

分銅鎖、と。

伊月は左袖から鎖を取り出すと、左手に持ち直してブンブンと回していた。その早さはいくつもの残像が生まれるほど。感触を確かめるように振り回した後、止めるためなのか振り下ろした。

ドゴオン！ と大地の叫びが天を劈いた。

皐月は地面がわずかに揺れたのを感じる。

おもりが落下したところを見れば、そこには大きなクレーターが生まれていた。地面はえぐれ、土が露骨にさらけ出されていた。その深さは落下の衝撃で作られたとは思えないほど、深い。

「……上々」

それだけ呟いて、伊月は鎖を何事もなくたぐり寄せていた。

「な、な、なにあれ……」

神楽が体を震わせて戦っている。視界に入る他の人も同様だった。あれほど大きくぼみを見せられては鎖の異常さに気づくのだろう。1度だけ見たことがある皐月は驚きはないものの、やはり恐怖がある。この学園でトップの魔術を誇る皐月でさえ、だ。

「あれは確か分銅鎖というれっきとした武器よ。けど、本来は捕縛や投擲など、ゆわば補佐みたいな武器よ。……本来ならね」

「何？ その含みは」

「普通はおもりはそうないんだけど……あのおもり、50キロはするわよ」

「50ツ！？」

神楽がその顔を青ざめる。それもそのはず。常人ならば片手で振り回すほど軽々しい数字ではないのだ。

「さらにその長さも普通より2倍以上あるわ。兄さんが特注で頼んだものらしい。生身で受けただじやあ済まないわね」

「あの人そこまで怪力……」

「まだあるわよ？」

へ？ と抜けた声を出す神楽に皐月は顎で指した。振り向くと、伊月は足の裾をめくり上げ、何かを取り外していた。どうもすねに巻いた白い袋のようだった。

伊月はそれを手に持つと、不意にそれを日比野に向かって投げた。目の前で起きた一連の出来事に呆然としていた日比野は、急に迫ってきた飛来物に慌てて身を躲す。そんなに速く飛んでこなかったため、それは容易だった。

だが、問題はそれが地面に落下する時にあった。

ズドン！ とまたも異常に派手な音を出して白い袋が地面にめり込んでいた。それは、まるで鉄球を落としたかのような陥没のしかただった。

「な、なんだこれは……」

日比野が傍に落ちている白い袋を見て声が震えている。その間にも、伊月は足のほうから袋を2つ取り出していた。

だがそれは投げる気はないらしく、傍に捨てた。伊月は次に左足の裾をめくり、同じ物を3つ外し、放つていく。その度に大きな、陥没したことを示す音が鳴っていた。

「皐月。あの袋って……何？」

「おもりよ」

おそるおそる聞いてきた神楽に、皐月は視線を話さないまま簡潔に答える。

「兄さんは左右の足に3つ。右腕に4つのおもりを巻いてるのよ」

「その重さって……」

「1つ10キロはするわね」

「つていうことは……100キロ!? 鎖も合わせたら150!?」

そんなものを着けてたの!？」

「鎖とおもりの重さは別よ。だからさらに多いわね」

あんぐりと口を開けて神楽は固まってしまった。総勢150キロより重いおもりをつけていたのだから当然の反応だろうと皐月は思う。

だから察して欲しい。

このおもりを外したら、一体どんな動きをするのかを。

伊月は左腕に巻いていた最後のおもりを手に取り、落とした。そのおもりは新たななくぼみを彼の周囲に生む。伊月の周りにあるくぼみは9つになっていた。それが、準備完了の証となっている。

尋常ならぬ雰囲気誰かが息を呑む。

これ以上ない危険を感じたのか、日比野は咄嗟に詠唱を始めた。簡単で即座に出すことの可能な、アイス・ニードル氷針>だった。

「取る——」

ばくさんか
「爆散華」

だが、それは即座に中断される。

その詠唱が始まった瞬間、ごきりと骨の逝ったような音が炸裂し、日比野の体が大きく後ろへ吹き飛ばされた。それは勢いを殺さず結界の壁に衝突し、結界が悲鳴を上げたかのような甲高い音色が空気を震わせた。

その間、1秒にも満たない。動体視力が良くなくては残像のように見えてしまう光景だった。

「……え、いつの間に」

「あれこそが彼の攻撃スタイルよ」

皐月は神楽に解説を加える。

「尋常じゃない鍛え方をして体を強化し、さらに攻撃の加え方を工夫している。たった一点に絞ることとそこに威力を集中させるようにね。一瞬で間合いを詰め、強力な一撃を放つ。受けた相手はまるで華が咲くように爆ぜる。それが兄さんの拳術<爆華術>よ」

ばくがしゅつ

2話 負を纏った少年(2) (後書き)

評価、感想お待ちしております。

3章 負を纏った少年（3）

「……で、今のが爆華術初級術技<爆散華>」
ばくさんか

「嘘ッ！？ あれで初級！？」

驚きの反応を見せる神楽に、皐月は無理もないと嘆息する。<爆散華>はただ拳をぶつけるだけ。なのに、その威力は桁外れである。しかし、それを食らっても尚動き出そうとする影があった。見れば、うつと呻きながら体を起こそうとする日比野の姿があった。

「え……あれでも動けるの？」

「あれは魔障壁のおかげよ」

「え？ それって魔術だけじゃないの？」

魔術を練ることが出来る全ての人は無意識下において魔力を放出している。貯めていた魔力が己の体を蝕まないようにする自己防衛だ、と専門家は言っている。

不思議なことに、それは体を覆うように流れ、魔術をある程度軽減出来る壁として成り立っていた。これが魔障壁と呼ばれる物だ。そしてこれは、体の内に取り込める魔力が多ければ多いほど強度も強くなる。

伊月はそれがなかったため、実質魔術と戦うのは危険なのだが。

「物理攻撃も防げるのよ。みんな魔術で戦うから知らないことだようけど」

魔術が簡単に扱える今、魔術は何にでも応用されている。明かりを灯すにも、テレビを点けるにも根源には魔術が関わっているのだ。それ故に、魔術というのがほぼ全ての人の攻撃手段となっている。拳で殴ってもそう痛くないと知る人はごく少数だ。

だが、だからこそ言えることがある。

「けど待って。日比野先輩って魔力量が大きいよね。中級魔術じゃ傷1つつけられないぐらいに。そんな人をあんなに飛ばした彼の拳の威力って……」

それに気づいた神楽は一度考え、ぞつと寒気を感じて口を震わせた。恐れをなした彼女を皐月は呆れた目で見下ろしていた。

「そんなびくびくしてどうするのよ。それでも風系魔術筆頭でしょ？」

「皐月みたいな魔術師筆頭じゃないんだから！……あ！」

どごと鈍い音が鳴って神楽が声を上げ、皐月が振り向いた。

いつの間にか、日比野が接近していた伊月のひじうちと結界の壁に挟まれている状態があった。壁を使う事で衝撃を逃がさず、相手のダメージを相乗させる。えげつないやり方だ。左手に巻き付いている鎖がじやらんと音を立てる。

さらに、肘を離してその場に倒れそうになる日比野を掴み、壁とは逆の方向へ投げ飛ばす。片手で普通の男を投げ飛ばすなど並ならぬ賢力だ。

無造作に投げられた日比野は地面を数度転がって、空を仰臥する形になる。日比野が空中に浮いている間に伊月は地を駆け、飛び上がる。ごほ、ごほと咳き込む彼の目に映るのは、日の光を遮って降ってくる伊月の踵だった。

りゅうがしやう

「……龍牙衝」

「ぐばあ！？」

ごすつと踵が日比野の腹に大きくめり込み、一緒に彼の体も地面にわずかばかり沈む。明らかな威力を物語る一撃に、日比野は目を見開いて絶叫した。

魔術で守られていても、その痛みは想像を絶するものなのだ。

腹を押さえて呻いている日比野に、伊月は感情の消えた目で見下ろしていた。

「……生きている価値のない人間にいたぶられている気分はどうだ？」

彼の言葉は氷の冷たく、刃のように鋭い。

その全てが、容赦などないことを容易に判断させた。

「……取る、形は、鋭利な、茨！」

喋るのも難しそうな彼の口から、<氷針>の呪文が紡がれ、周りに先の尖った氷柱がいくつも形成され始める。

それを見ても伊月は表情変えず、

「……まだ、唱えるだけの気力はあるか」

そう言いながら、しかし何故か彼は何もアクションを起こさない。術者を殴れば詠唱を中断できるというのに、それをせずただ日比野を冷えた目で見つめている。

「何やってるの？」

「……」

神楽の疑問に皐月は答えない。ただ黙って、何かを待っているかのように眺めていた。

アイス・ニードル
「——<氷針>！」

「……遅い」

術名が叫ばれると、伊月は腕を回すようにして鎖を解いた。

術者の意志に従って伊月を刺さんと何本もの尖った氷柱が日比野の頭上に弧を描くように出来上がる。普通ならばこのまま伊月の体に当たり、魔障壁を持っていない彼は貫かれてしまう。

しかし、ぶうんと豪快に重い物が振られる音とパリンという破砕音が鳴り響いた。

「……え？」

一瞬遅れて、日比野が間抜けな声を出す。そこには得物を振り終えたかのように姿勢を低くしている伊月の姿があった。次いで、当りに舞う水色の破片。

それがなす意味は、伊月が鎖で氷柱を全てたたき壊した、ただそれだけのこと。

「ッ！？ 取る形は我が手足！」

だが、一度で全ての氷柱を破壊するには相当な技術がないと出来ない。それを余裕綽々にこなした伊月がありえないのだ。

日比野は動揺し、自ら使う武器を錬成するための魔術を詠唱する。たちまち彼の手に蒼い光が集い、青色の剣が生み出された。それを

握り、斬りかかるために振りかぶる。

「だから、遅い」

だが、伊月は近寄らせる時間を与えない。

伊月は瞬間移動のような速さで一氣に分銅鎖の攻撃範囲まで間合いを詰めると、まず上から下へ鎖を叩きつけた。

ズゴン！ という鈍い音とともに地面が爆ぜ割れる。その衝撃が足に伝った比野がたたらを踏んだ。そこを狙うように、伊月は体をひねって叩きつけた鎖をそのまま横へ引っ張った。

風を切り、斜め下から迫り来る分銅鎖に避ける手立てはほぼない。日比野は重さ50キロはあるおもりを腹に受け、鎖で剣を破壊されて大きく横へ振り飛ばされた。先ほどと同じように彼は転がり、大きくむせる。

その暇さえ与える気はないように、伊月は横に振った鎖を引き寄せ、日比野の元まで一瞬の間に走ると大きく飛び上がり、鎖を叩きつけた。

当てはしない。それはおもりを日比野の頭の上に落とすだけに終わらせる。だがそれは衝撃を生み、日比野のに当てると共にすぐ傍で落ちたという恐怖心を煽る。

「彼が余裕な時ってね、わざと攻撃を誘うの。その理由って分かる？」

突然、皐月がそんなことを言い出した。

「さっきのこと？ ……さあ」

神楽は記憶力はいいが、その反面論理力が乏しい。従って、考えることは苦手だ。魔術関連は別物だが。

「わざと隙を見せ、そこをチャンスと狙った敵がそちらも余裕を持つてある程度威力のある攻撃をする。だけどそれは故意に作ったもの。絶対に防ぐか躲すかして、相手の隙を逆に狙うの」

「……やれると思ったらいとも簡単に躲され、面食らう。そこを叩くのね」

「そ。今先輩にも隙が出来たでしょ？ それもかなりの」

その間1秒。相手が反撃するには多すぎる時間だ。

「なんというか……人の心を折るやりかたね」

「そっという人よ。兄さんは」

わずかに悲しげな声色で、皐月は目を伏せた。

その後の攻撃は一方的の他なかった。伊月は無理がなく回避しながら攻撃し、日比野は守ることすら出来ずに攻撃を受ける。それは今の戦況を語るに十分な言葉だった。しかも、伊月の動きに無駄はない。持つ物が無骨な鎖でなかったらさぞ優雅に見えるだろう。

その様子をずっと見ていた神楽が、ぽつりと呟く。

「……圧倒的」

「……今の人たちは魔術に頼りすぎて体を鍛えない。だからその逆を突いた兄さんに対応出来るのはわずかな人。しかも魔術を頼らない戦法でも兄さんは圧倒的。多分、あなたの風系魔術じゃ叶わないわ。梓、祈でも勝機は少ないわね」

炎系魔術師、土系魔術師の筆頭の名をそれぞれ挙げる。

「君はどうなの？ 皐月」

「……勝てる確率は五分五分ぐらいかしら」

「そこまで言わせるか……」

日本は魔術が一番進歩している。その中で魔術において最高権威の学校で、そのトップに立つ彼女はまさに世界一の魔術師だ。

その彼女が、五分五分。

「私の刀も簡単に躲すからね」

そう言つと、伊月は鎖をたぐり寄せるなり転がっていた日比野を軽く蹴り飛ばした。もはや力がないように彼の体は宙に浮き、地面に投げ出される。いくら魔障壁で守られているとはいえ、ダメージが大きいのだ。

「来いよ」

「ごほごほと咳き込む日比野に、伊月は冷たい声で言う。

「お前の持つ最高の術式で来い。お前の希望を砕いてやるよ」

伊月が肌をさらす右手で中指を空に突きつける。

それは煽り。

自分が余裕であることを示し、相手を怒りに染めるものだった。日比野はふらふらと立ち上がる。体は疲労を見せながらもその目はどこか、憤怒の情を湛えているかのようにだった。

その震え、今にも舌をかみ切りそうな口からこぼれる、言葉。

「……肌をなでるは拒絶の冷氣」

「……まずいわ」

それを聞いた皐月が、初めて目に分かるほど顔を青ざめた。

3章 負を纏った少年(3)(後書き)

指摘、感想お待ちしております

4章 負を纏った少年（4）

「……肌をなでるは拒絶の冷氣」

日比野がそう発した途端、結界内に肌を凍らすように冷たい風が渦巻いた。

風はその強さを増し、ある一点、伊月の頭上に収束していく。

「彩りをつけるは氷原の蒼」

集まった冷風はその密度を強くし、淡い蒼に輝いていく。

「やがてそれは形を生み」

淡く輝いていた蒼が突如びきりと音を立てて凝結し、さっきまで何度も見てきた氷の形を生み出した。

その規模さえ除けば。

日比野の詠唱により生み出された氷は伊月の頭の上をすっかり覆ってしまふほどの大きさを誇っていた。厚みも先程までと比べ物にならず、どこまでも、天の限界にまで届いていそうな、その氷塊。
「……へえ」

伊月は天空の氷塊を見つめていた。

大規模の魔術であることは承知している。それでも伊月は動かない。腕組みをした仁王立ちで、まるで時を待つかのように前を見ている。

「仇なす者を裁く氷鎗となす！」

その詠唱が、巨大な氷塊に最後の変化を与えた。

バキバキバキバキ！ という嫌悪感を呼ぶ音を鳴らして氷塊が下に向けて、まるで樹木が根をはるように突き出されていく。それも6本。1本を取り囲むように5本があり、そのどれもが鋭く巨大だ。そのうちの1つが伊月の脳天を捉えている。

それはそう、氷の手のような、凶悪な魔術。

氷系魔術、最上級。

結界を取り囲む誰もが、その圧倒的な魔術に言葉を失っていた。

「絶対なる力で零に帰す！ 絶対零度！」
アブソリュート・ゼロ

日比野の顔に絶対の勝利を確信する表情が浮かぶ。
最上級。どの系統魔術でも一撃必殺の威力を誇る魔術だ。それを
受けて、立っていられる者などいない。その事実から日比野に余裕
が生まれていた。

そしてまた、その大きな注目の故に誰もが目を奪われている。
その結果、誰一人として気づくことはなかった。

伊月の口が、残虐につり上がっていたことに。

伊月は術の発動と共にテーピングで巻かれた右手を上げた。そこ
を貫かんと、大きな棘を6本宿した氷塊が落下する。音もなく、つ
り天井のように降ってくる致死の氷塊にもかかわらず、伊月は逃げ
ずに右手をかざしたままだった。

ただ、彼の目に諦念は存在しない。

「……言っただろ」

あるのは2つ。たった2つの負の感情。

「あんたの希望、絶望に変えてやると」
憎悪と、殺意。

それはずっと、北城伊月という人間を形成してきた感情だった。
伊月の右手が触れた途端、凶悪に牙を剥いた氷塊は忽然と姿を消
した。砕け散るでもなく、溶けるでもなく。元々存在しなかったか
のように一瞬で消滅する。

代わりに、彼の右手に変化があった。

伊月の右手にあったテーピングは切れ、どこかへと飛び去ってい
た。その右手を覆うように、蒼くはつきりと輝く光がまとわりつい
ている。それが何か、この場にいる全ての人は必ず知っているはず
だ。

氷系魔術、その発動に使う魔力そのものだ。

「な、あ……」

日比野が怖じけついたように後ずさりをする。目の前が真っ暗に
なったかのような怯えようだった。それは自分の奥の手である最上

級魔術を潰されたことと、さらに伊月の右手に宿る蒼い光を見ての反応だった。

本来、魔力は色が目に見えるほど凝縮するにはそれなりの魔力量と凝縮率がある。先ほどのく絶対零度アブソリュート・ゼロ>でさえ淡い蒼の光しか出なかったほどだ。

それが今、明確な蒼を灯している。つまりそこに溜まっている魔力は甚大な量で、それが右手だけで収まるほど凝縮しているということだ。

その威力は、1人を除いて誰にも分からない。

「絶望を与えられた気分はどうだ？」

掲げた右手を戻しながら、そう伊月は言う。

右肘を引き、足を広げ。伊月は走り出す構えを取る。

「生きる価値のない人間は、力に溺れて努力をしないあんたみたいなことを言うんだよ、先輩」

伊月の姿がふっと消える。

瞬きをする間に、彼は日比野の無防備な体の至近距離にいた。腕を引き、飛びかかるように殴る姿勢を作っている。しかし手甲をはめた左手ではなく、蒼の光を放つ右手を使って。

一見すればく爆散華>と同じ構え。

しかし、その帯びた氷の魔力がそれは違つと異変を知らせていた。

「無に帰れ——きよむ虚無、いつせんか一殲華」
アフソバ・ウォール

「吸収防壁！」

伊月が拳を、放った。それこそ、ズガン！ と大砲でも撃ったかのような轟音。

魔力を伴った右手が日比野の腹に触れた瞬間、音速もかくやという勢いで彼の体が吹き飛ばされていく。その進路上には結界の壁がある。最上級魔術をぶつけたとしても割れないはずの強度を持つその壁が、

バキーン！ という不協和音を奏で、結界が粉碎された。
「ッ！？」

観衆に驚愕が走る。

しかし、まだその先にはオレンジ色の壁があった。＜吸収防壁＞という名の魔術で、文字通り衝撃を吸収するクッションの役割をする壁だ。

だが、それすらもバチン！ とゴムの切れたように壁に穴を開けた。しかしそれがあつたおかげか吹き飛ば力が相殺され、それでも速く日比野の体は中庭をごろごろと転がっていき、校舎の壁に鈍い音を発して激突するまで止まらなかった。

静寂が辺りに広がる。

戦いが終わったというのに、誰1人として言葉が出ない。皆目の前で起きた出来事に動揺を隠せず、近くの人と確認を取っていた。

伊月はただ、目線の先にいる人物を睨み続けている。

「……何の真似だ。北城」

模擬刀を差した、他の生徒とは一線を画した美貌を持つ少女――

北城皐月は彼の鋭い視線にむしろ冷えた視線を返していた。

彼女が、先ほどの＜吸収防壁＞を出した人物だ。
アブソルバ・ウォール

伊月は皐月に腹を立てていた。その魔術のせいで自分の技を邪魔されたのだから。

北城の兄妹は真っ向から視線をぶつけている。傍にいる女子生徒がおどしているのが逆に目立っていた。

「それはこちらの台詞よ。兄さん」

彼女は言い返す。

「何故＜虚無一殲華＞を使ったのかしら？ 日比野先輩をあそこまでする必要はなかったでしょう？」

ちらりと後ろに目をやる。日比野はぐったりとしていて動く気配がなかった。魔障壁のおかげで背中への衝撃は免れたかもしれないしかし、あんな威力の拳を食らえば内臓がいくつか潰れてしまった可能性はある。

1人の人間をそこまでしておいて、しかし伊月に反省の色はない。
アブソリュート・ゼロ
「逆に言う。あいつは決闘のルールを破って＜絶対零度＞を使った。

それをまともに受けたら確実に死んでた」

決闘には1つだけ、最上級魔術、または独自魔術を使つてはならないというルールがある。理由は簡単、死人を出すのを避けるためだ。これを破つた場合、退学処分となる上に魔術禁止命令が何年にわたつて下りる。

「そう仕向けたのはあなたでしょ」

「乗せられてルールを見失うほど頭が弱かつただけだ」

「……まあいいわ。だから右手で防いだと？」

「そうだ。俺には魔力を貯められることは出来ないから、それをそっくり返した。それだけだ」

皐月は顔をしかめた。

伊月が魔術を使う人に対抗するために編み出したのは<爆華術>だけではない。

それは右手に宿る力だ。彼の右手は相手の魔術を吸収することが出来る。それは先の<絶対零度>のような最上級魔術でも可能である。さらに、その魔力を全て使つて相手に叩きつけることも出来る。これが<虚無一殲華>だ。

だが、なんでも吸収出来るというわけでもない。範囲系魔術という対象を中心として展開される魔術は消すことが出来ない。<氷瀑^{フロスト・ブ}リスン牢>をもろ受けたのはそれが理由だ。

それ抜きにしても、伊月は対魔術師なら無敵とも言える力を持っていた。

「だからつてあれは……」

そしてあの<虚無一殲華>は右手で行うため、魔障壁も消してしまふ。いわば、生身の体に砲弾を至近距離で受けるようなものだ。

その威力は、まさに残虐なり。

伊月は細い目をしながら口を開いた。

「問題など無い。俺の拳は魔術ではない。<虚無一殲華>も結局拳術の1つなんだからな」

だからルール違反ではないと伊月は言いたいのだ。

それは間違っていない。なのだが、皐月が言いたいことは別だ。

「そうじゃなくて――」

「近づくな。魔術師」

皐月が詰め寄ろうと一步踏み出した瞬間、伊月は明確な拒絶の声を放った。その冷たく鋭利な声が彼女を金縛りに遭ったように硬直させる。

長年積み重ねてきた嫌悪の情が、無意識にあふれ出ていく。

「てめえの言いたいことは分かる。だがな、そもそも俺はてめえらと同じだと思ったことはない。てめえらが俺を人間と認めないでいるようにな。……人が虫や獣を殺すのと同じだ。同じじゃないなら、殺したって問題ないだろ？」

右手で結界に触れる。

それだけで、風穴の空いた結界が無くなってしまふ。結界は道具を使わなければ決して解くことは出来ないはずなのに。

「後、俺はてめえの兄じゃない。虫が走るから二度と呼ぶな」

魔力の溜まった右手をそのままにして、伊月は皐月とは反対の方
向へ歩き出す。

数歩歩いて、伊月は突然ぴたりと止まった。彼女に背を向けたまま、声を発する。それはとてもよく響いて、刺々しかった。

「俺はてめえらが俺にしたことと同じことをしている。文句があるならかかってこい。そのぼろ屑と同じ運命にしてやる」

そう吐き捨てて、伊月は中庭を後にした。

4章 負を纏った少年（4）（後書き）

感想待ってます。

5章 銀髪の少女と空間魔術（1）

「ただいま」

誰に向けるでもない言葉を、伊月は呟いた。

とあるマンションの5階、その内の一室が伊月の家だった。1DKで家賃はそこそこ。学生には願ったり叶ったりの家である。

この部屋に伊月以外の住人はいない。血縁である皐月も本家に世話になっていて、伊月はそこを追い出された身なのだから。

だが、今は話が別だ。

玄関からリビングまでの通りを突き抜けて、伊月はドアを開く。

家具は少なく、黒で統一された世にも不気味な空間が目の前に広がった。完全な伊月の趣味である。

その隅に、1人白を放つ少女がいた。

月の光のように綺麗な銀髪に、深い蒼を持つサファイアの瞳。小柄で幼い顔をした少女だった。古風なドレスを身にまとい、膝を抱えて伊月を見ている。その目は強い警戒心を訴えていた。

昨日、路地裏でゴミ捨て場に寝ていたところを拾ってきた少女だ。だがその時と違い、風呂に入れたので髪や肌の色は幾分が良い。右すねには包帯が巻かれ、まだそこからは血がにじみ出ているようだった。

「大丈夫だったか？」

伊月は少女に英語で話す。昨日意思疎通を試みた時、彼女が喋る言語が日本語ではなく、英語に似たものだとしてすぐに気づいたからだ。少女は睨んだまま、口を動かさない。

「警戒するのは分かるんだけどな」

ため息をつく伊月に、学園のような険のある声色はない。

「……解けるわけがありません」

とても落ち着いた、けど可愛らしい声がそれに答える。

「のわりには飯は食うんだな」

ふっと少女の足下を見た。そこには今朝置いていったロールパンの袋が3つあり、全てが空になっていた。1袋に9つ入っていたから、計27個ものパンを食べたことになる。相当腹が減っていたのだろう。

少女はその視線に気づき、かあつと顔を赤らめながら反論した。

「そ、それは出された物は食べないと申し訳ない、です……から……」

……

「素直に腹が減ったと言えば？」

「そんなこと……！」

必死に拒否をする少女に、伊月は心の中から悪戯心が浮かび上がってくるのを感じた。

「じゃあ今から飯を作るけどお前はいらないんだな」

「えっ!？」

「今日はちよつと奮発するつもりだったけど、まあいらないっていうなら俺1人で食べようつと」

「う、うう!？」

しまった、と言わんばかりに少女は青ざめる。

紅くなったり蒼くなったりする表情に伊月は小さく笑いながら、それでも意地悪をした。目の前でビニール袋をぶらぶらと揺する。

「ほれほれ、飯とプライドどっちが大事なんだ？」

「う、うっ……」

今にも泣きそうな表情だが、決して涙を見せまいと耐えている。

その様子が伊月にとってはとても面白い。

「最後の選択だぞ。どうするんだ？」

少女は色が変わるほど下唇を噛んで、

「……ます」

「え、何だつて？」

か細い声だったので聞き取れなかった。もう一度聞こうとすると、少女は膝を抱えたまま大きく頭を下げた。

「お願いします。私に情けを！」

「ただ警戒されようと、生理的要求には叶わないことを伊月は改めて悟った。」

「……これは？」

「すき焼き。牛肉とか豆腐とか、野菜などをを入れて調味料で煮込むんだよ。食べる時は溶いた卵にひたしてな……っておい」

「ぐつぐつ目の前で煮え立つ鍋に興味津々の少女は、自分から聞いていながら果たして今の説明を聞いていたのだろうか。」

「その後、すぐに買ってきた野菜や肉などを取り出して台所に行き、手際よく行つてすき焼きの下準備を行い、それを取り出したコンロの上に乗つけて火を点けた。ちなみにこれも炎系の魔力を応用して灯っている。」

「ぐつぐつと沸騰しですが、もう少し待った方が味がしみこむ。なので食欲に飢えた少女を嗜めながら、伊月は考え事をしていた。」

「この子はどこから来たのだろうか、と。」

「外国、というにはあまりにも容姿が特殊すぎた。蒼い目はヨーロッパに行けば見られるだろうが、白髪はいてもあんな純粹に輝く銀の髪はそういない。着ている服もそうだ。とても、今の時代に着るような雰囲気のものではなかった。」

「そのまま思考に老けようとしたが、目の前のもぞもぞする少女に頭がいつて中断した。」

「ま、まだですか。えっと……」

「伊月だ」

「イツキさん、まだこれは食べてはいけないのですか!？」

「鼻孔をくすぐるいいにおいに耐えられないのだろう。少女がとも目を輝かせてせがんでいた。その姿は年相応に子供っぽい。」

「というか、さっきまであったはずの警戒心がすっかり抜け落ちていた。指摘するべきか、いやするべきではないだろう。」

「ん……。いいんじゃないかな」

伊月が肉と豆腐、それと糸こんにゃくをつまみ上げて少女の卵をほぐした受け皿に入れていく。彼女には箸は使えないだろうとフォークを渡していたが、それでも具材を取るには難しいだろう。

「そ、それでは頂きます！」

「頂きます、と」

自分の分もよそい終わるなり少女はそう言っで肉をフォークで取った。他の人がよそい終わるまで待つとは律儀な子である。

少女は肉を口に運んだ。もぐもぐと咀嚼する様子を伊月は眺めていた。何となく絵になっているな、と思わなくもない。

少女は何度も噛んだ肉を喉に流すと、ぱあっと花が咲いたように顔を綻ばした。

「すっごく美味しいです！　このようなものを食べたのは初めてですよ！」

「そこまで喜ばなくても。肉は食べたことがあるだろ？」

「確かにありますが、ここまで柔らかい物は味わったことがありません！」

「そっか。まあ喜んでくれるなら何よりだな」

伊月は苦笑しながら、自分の受け皿に入っている肉を口に運んだ。一口噛めば、肉の柔らかさとうまみがいっぱいに広がり、何度も噛んでいく。それくらい美味しかった。

それもそのはず。この肉は黒毛和牛なのだから。いつもならそんな豪華な食卓にしないのだが、今日は気分だ。

「これも美味しい！　何なんですかこれ！」

「それはご飯。この国の主食だ」

フォークでご飯を突き刺し、口に運んでは驚いている。やっぱり自分で取りたいだと持ってきた玉じゃくして少女は何度もすすき焼きの具を受け皿に入れていく。お腹が空いていたのと飯が旨いからかすごいがつきようだった。

それを自分の分も確保し、食べながら見て思う。

この世界の三大穀物を知らないとは、一体どこから来たのだろう。

それでいてフォークの扱い方は分かるのだから知識がないというわけではなさそうだ。

——とおさま。

そういえば、出会った時にそんなことを言っていたことを思い出す。

もしかすると。いや、まさかとは思うが。

「……ちよつといいか？」

「はい？」

フォークの手を止めて、少女はきょとんとした瞳を伊月に向ける。なんとなく和やかになっていた空気を壊すのは気分が悪いが、仕方ない。

伊月は今し方浮かび上がった1つの結論を、少女にぶつけた。

「お前さ、もしかして異世界の王女様か？ それか貴族？」

「ッ！？」

カランとフォークを落とした。海のように蒼い瞳は驚きに見開いている。

「……正解のようだな」

どうやら自分でもないだろうと思っていたことが当たっていたらしい。少女ははつと気づいて慌てて取り繕うと目を泳がすが、もう隠し通すのは無理だろう。観念したように顔を俯かせ、銀のカーテンが表情を隠した。

ぐつぐつ、とすき焼きの煮える音が虚しく聞こえた。

「どうして……」

「今お前が食べてた白いご飯は米っていう世界三大穀物と言われるほど有名な穀物だ。それを知らない人などそうそういない。だがお前の所作から見るとどうも頭が弱いとは思えない。だからこの世界じゃないところから来た、というのを思った。まあそう思ったのもある情報を知っていたからだけだな。それとさ、お前覚えているか？ あの場所で出会った時、お前『父様』って呼んだんだ。庶民はまずそんな呼び方はしない。だからそれなりに身分のある人だと考

えた」

「……」

「で、何でか知らないけどお前は追われて、足を負傷した。腹も減って動けないであそこで止まっていたら俺に発見された、ということか」

苦虫を噛み潰したように少女は体を震わせている。何かも当たりだということが、それで分かった。

あの怪我は貫通傷。だから事故や自分でやったとは到底思えない。だから誰かに追われていたというのは確信を持てる。

そうならば、極度の警戒心も納得がいく。

知り合いの誰もいない世界で、訳が分からず追われた。食べ物も得られない環境で彼女の精神も摩耗したに違いない。

「気にするな。別にお前にどうこうするつもりはないさ」

伊月が何気なく言ったその言葉に少女は顔を跳ね上げる。

伊月は一度席を離れ、新聞受けから取り出した手紙の中から何かを取り出した。一般的なサイズの紙は、ある人捜しのものだった。

その人物は銀髪に蒼い目、小柄の少女。間違いなく目の前にいる少女のものだ。彼女は自分の特徴が書かれた紙に驚きを隠せない。

それでもって、下の方にはこう書かれていた。

『この子を見たらこちらに通報してください。有力な情報を提供してくれた方には懸賞金100万円をお渡しします』

と、電話番号。それに度外な報酬金。

間違いなく、指名手配のチラシだった。それも重要人物の、である。

「つまり、今俺がこの電話番号に電話し、お前を拘束していたら100万円が手に入る。この額は人が普通の暮らしを3ヶ月ぐらい出来る額だ」

けど、と伊月は言って。

ビリビリッとそれを縦に引き裂いた。2つに裂けた紙は後ろに放り出され、ひらひらと舞って床に落ちた。

「俺はこいつらが嫌いだ」

目を丸くしている少女に伊月は憮然とした表情で語る。

「だからあいつらのためになるようなことはしない。お前が追われるっていうんなら守ってやるさ」

これでも強いんだぜ？ と伊月は笑う。

その明らかな親切心に、少女は逆に不信感を抱いていた。

「何が目的ですか？」

「え？」

「それを行う代わりに、貴方は何を所望なのですか？」

少女は真剣な眼差しを向けてくる。

この少女は本当に聡い。子供らしい無邪気な心もありながら、それでいて何も鵜呑みにする無垢さを持ち合わせていない。常に冷静で、疑り深い。

伊月は感心しながら、それでもポーカーフェイスを繕った。

「……何もないかな」

「なら、私は貴方を信じられません」

「どうして？」

「そんな人を信じるのは、とても難しいです」

少女は眉を下げる。

「人は神ほど完全ではありません。無償の愛が人に出来るわけがないのです」

「……聖職者をけなすような言い方だな」

「私はずっと見てきたんですよ。人というものは常に、裏を持っている」

それはやんごとなき身分の故か。

おそらく、猜疑心を持たないと自分の身が危ぶまれるところにいたのだらう。

それはとても大切なことだ。誰かを心のどこかで疑っていないければ、信じた者に裏切られ背にナイフを刺されてしまう。

「そうだな。俺はお前に同情した」

だから、伊月もそう言った。

「同情……？」

「そ。お前この世界には信じれる者はいないだろ？　だから、さ」

「イツキさんも……？　でもあなたはこの世界の人……」

「そういう意味じゃない。俺は世界の外れ者っていうことさ」

誰もが持つ魔胞がない。だから魔術が使えない。

そのせいで虐げられ、侮られ。常に痣の絶えない人生を送った。時には関係ないことで罵られ、骨を砕かれた。

味方などこの世界に存在しなかった。

「俺と似ていたから、尚更その道を歩んで欲しくなかった。それだけだ」

別に説得しようとしたわけではない。

ただ、初めて出会った時のあの瞬間が、昔の自分と重ねてしまった。それを言っただけだ。

少女は何か考えるように手を腿の上に置き、頭を垂れる。

「……確かに私にとってここに知る人はいません」

少女の矮躯が小刻みに揺れる。

「そしてこの世界の人は私を襲い、傷つけてきました。だから頼ることが出来る人はいないと、そう感じました」

しかし、と少女は顔を上げる。

その顔は疲れた顔を見せながらも、それでも微笑んでいた。

「貴方の顔、言葉に嘘が見えませんか。……だからこの世界で一度だけ、あなたを信じてもいいですか？」

本当に、神にすぐるような言い方。

こんな目をされるととっても罪悪感を感じる。何もしてないのに。同時に、とても守ってあげたくなる。

「……了解」

小さく微笑む。

例えば自分が信じれるような人でなくても、彼女の前だけは頼れる人になってみよう。

伊月はそう、思った。

5章 銀髪の少女と空間魔術（1）（後書き）

こちらでやっとメインヒロイン登場ですね。
感想、お待ちしております。

6章 銀髪の少女と空間魔術(2) (前書き)

忙しさのせいで予定の投稿よりずいぶん遅れてしまいました。
……言い訳ですね、はい。すみません。

6章 銀髪の少女と空間魔術（2）

「ふーん。てことはフォルネウルは王女様なのか」

「下の名前で結構ですよ。けど第3王女で王位継承権はないんですけどね」

再び食事を再開する2人。お互いのことを明らかにしたからかいから自然な会話が生まれていた。すき焼きの汁がいくらか無くなってしまうがそれは気にしなくてもいいだろう。

だが、この光景は王族には似合わないだろうと伊月は何となく思った。

「んじゃ失礼して。けど継承権がない？」

「もう兄が7人、姉が2人上にいるのですが、女の私たちはあらかじめ取られたんです」

「兄姉がそんなにいるのは分かるが、なんで取られたんだ？」

「政略結婚に使われるのを避けるためです」

シルヴァリアは目を伏せた。

「王族に関係を持つことは誰もが狙うことです。結婚できる歳になればいろんな人から求婚されて、最悪、無理矢理襲われることさえあり得るのです。実際私がいた世界のある国では、王女が誘拐されて悪名高い公爵の息子に孕まされたという事件がありましたから。」

まあその子も殺した上で、その公爵家の親子を公開処刑しましたが「……」

生々しい話だった。

シルヴァリアは表情を変えずに卵の中に沈んでいたしらたきをすすっている。そういう話はもはや抵抗がないのだろうか。

と、シアはしらたきのぷりつとした食感に目を見開いた。

「これ、弾力がありますね」

「そうだな。それでカロリーがほとんどないから健康にもいいぞ」

「カロリー？」

「あ。うーん、まあ端的に言えば太らない数値？」

絶対間違っていると思うが、詳しい説明をしても無駄だろう。

伊月とシルヴァリアは時々互いのことを語りながらすき焼きを食べ尽くしていった。元々そんな多く作っていなかったのでゆっくりでも十数分で鍋の中は空になっていた。

「本当に美味しかったです。こんなに食べたの3日ぶりです……」

ティーパックで用意した紅茶をすすりながらシルヴァリアは至福といった表情をした。3日ぶり、という言葉に鍋の片付けをしていた伊月は反応する。

「ちよつと待て。シルヴァリアって一体今までどうしてたんだ？」

栄養状態が良くなさそうな体や、置いていった9つ入りロールパンを3袋も食べたことから相当腹が減っていたのはすぐに分かったが。

シルヴァリアは紅茶をコトリと置いて、言った。

「3日間ずっと水だけで過ごしてました」

「水……」

「川の水を飲んでました。ちよつと濁っていたのですが背に腹は代えられないと思って」

「つてちよい待ておい！？」

伊月は思わず叫んだ。ちよつと濁っていたところの話ではない。ここら辺の川の水が綺麗なはずがない。工場や生活排水が流れているようなところなのだ。

伊月は鍋をシンクに置いてすぐさまシルヴァリアの両頬に手を添えた。そして彼女の顔を至近距離で観察する。

「え、ええ！？ いいイツキさん！？」

「瞳孔良し。唇の色も正常。頬の色……紅い？ どうした熱でもあるか？」

「いえ、そうじゃなくて……」

「そつ、ならいいけど。気分悪くないか？ 歩きにくいとかは？」

「な、ないです……」

「じゃあ、大丈夫か」

伊月は納得したように頷いて頬から手を離す。シルヴァリアは伊月の手が置かれたところを何度もさすっていた。

「もうないと思うけど一応な。川の水はもう飲むな。あそこはウイルスとか細菌とかうじゃうじゃいるから、それに不純物も混じって汚すぎる」

「は、はい……」

「……本当に大丈夫か？」

「大丈夫です！」

そんな元気よく返されても逆に怪しいだけなのだが、もう伊月は介入しないことにした。目の前に座り、シルヴァリアと同じ物を口を含む。安物なので味は期待していない。だが、紅茶自体心を落ち着かせる効果がある。

ある程度整理して、伊月はシルヴァリアに尋ねた。

「なあシア？」

「……シア？」

シルヴァリアが小首を傾げる。

「あ、お前の名前シルヴァリアじゃ長いから短くさせて貰った。嫌だったら元に戻すけど」

一瞬だけ、彼女の目が驚きに見開かれた。

「……いえ、いいですよ」

そして、嬉しそうに微笑みながらシルヴァリア——シアは了承してくれた。その笑みはとても可憐で、伊月は一瞬心がざわついた。

ロリに開花するわけにはいかない。伊月は邪念を振り払って仕切り直す。

「で、シア。お前の世界について聞きたいことがある。いくつかいいか？」

「いいですよ」

「じゃあまず。お前の世界って魔術というのは存在するか？」

「しますね」

あつさりと断言した。

「それは誰もが使える？」

「いえ。使えるのは国民の3分の1といったところでしょうか」

この世界と比べると割合が少ない。この世界とは理が違うのだろうか。

「じゃあ魔術の元素は？」

「炎、水、風、土です。しかし一族秘伝の系統魔術というのがあるところもあります。私のフォルネウル王家も持っています」

基本的なところは同じ。しかし四元素やその派生しか使えないこの世界と違い、使い方は多岐にわたっているようだ。

「シアも？ それはなんだか差し支えなければ教えてくれないか？」

「……他の人には言わないでください」

ということとはそれほど重要機密だということ。それを話してくれるのは、さつき得た信頼のおかげなのだろう。

伊月は心して彼女の口から紡がれる言葉を待つ。

「空間魔術です」

「……空間？」

聞いたことのない魔術だ。それでも伊月は敵を知るために片っ端から魔術の勉強をしているために精通していると自負している。その伊月でも知らないと思った。

「そうですね、ある地点と地点を結び、そこをつなぐ扉を作るようなものですね」

「へえ……え」

「それと上級として今私たちがいる空間そのものをずらす魔術もあります。どれも膨大な魔力がいるのが欠点で、しかも私はそれ以外の魔術の才能がありませんでした」

「え……と……」

つまり瞬間移動と空間の断裂が可能。

もう絶句の一言しかない。シアは才能のなさにかっかりしているようだ、そもそも今聞いた限り空間魔術はこちらの常識では考え

られない。魔力の量がすさまじいのは難点だが、それでもおつりが来るほどの魅力がある。

使えればどれだけ便利なことだろう。

「……あ、なるほどな」

そこで、伊月はあることに思い至った。

それはシアが追われる原因となるものだ。いつどうやって知ったかは知らないが、おそらくこれを目当てにしているのだろう。

「どうしたんですか？」

「シア。お前の持つ空間魔術はこちらの世界には存在しないんだ」

「？　ということは魔術自体はあるのですね？」

「そうだ。で、多分狙いはその空間魔術を自分たちで扱えるようにすることだ」

今聞いた通り、空間魔術は瞬間移動を行えるものらしい。

それを使い、どこか2点を結んで移動する。確かにとても便利な魔術であるのだが、問題はそれを悪用された時。

即ち、軍事に使われたら。

例えばどこか2国が戦争を起こしたとする。そうして空間魔術を使って敵の中枢に出口を設けられたら、そこに強力な魔導兵器を送り込めば完璧なワンサイドゲームの構図だ。

それを考えると、今回襲ってきている奴らが明確になってくる。

「機関、か……」

「？」

「……いや、何でもない」

伊月の呟きが聞こえなかったシアはきょとんとする。伊月も敢えて説明はしなかった。

それは、伊月のことを不穏分子と捉え、いつも刺客を送り込んでくる奴らだから。その上、今伊月が通う学園にさえつながりがある。面倒なことに巻き込まれたのかもしれない、と今更ながらに思った。

「そついやさ、シアはなんでこんな世界に来たんだ？」

本来最初に聞くべきだろうことを伊月は今更ながら尋ねた。

「私も、本来ならばこの世界に来るなど思いもしませんでした」

シアは喉にカップに残っていた紅茶を流し込み、小さくため息をついた。

「その日は友好的な国の戴冠式だったのです。私も継承権がないとはいえ王女ですからその日は行くことになってたんです。その国は遠いためにユニバース・ゲート……あ、さっき言った場所と場所をつなぐ魔術です。それで行くことになってました。それで準備が整って踏み込んだ途端、叫び声が聞こえたのと同時にゲートが異常を来したのです。いつもはないもみくちやにされるような感覚を味わい……気づいた時はこの世界の森の方で倒れていました」

「……」

「そして、何が何だか分からず彷徨っていたところへ知らない服を着た人が現れました。私を助けてくれそうな感じはしたのですが、全身を真っ黒に覆っていて、あまりに服装が不気味だったのです。だから手を取ってはいけないと思い、逃げたんです。それから三日間は大変でした」

それは川の水を仕方なく飲んだという点から非常によく分かる。伊月は何も言うことが出来なかった。かける言葉を選べなかった。いわゆる彼女は巻き込まれたのだ。何らかの不具合で本来の行き先を示すゲートが別の座標に置き換わっていた。その先が世界も違うこの街だったわけだ。

望まずにこの世界に来て、分からずに襲われ。

伊月は彼女が不憫に思えた。

「……大変だったな」

かろうじてそれだけ言う。それも、聞き手からすれば憤りを感じる言葉だった。

それでも、少女は笑った。

「そうでした。けど、イツキさんがいてくださるのなら安心です」

「……なあ、俺はそこまで万能じゃないぞ？」

本当に安心しきった顔で言われたので伊月は逆に不安になる。自分がそんなに偉い人間ではないことは自覚しているのだ。

それでも、シアは首を傾けて。

「信じれる人が出来ただけで、何もかも違うのですよ」

「……そうか」

伊月はしんみりした顔で頷いた。

——それは俺も持っていないものなんだけどな。

心の奥底で本音を隠し、寂しい雰囲気になってしまったのでこぼんと咳をして話題を切り替えた。

「まあいいや。んじゃ最後。その空間魔術、それもお前が元の世界に変えるために必要な魔術を行うだけの魔力はいつ溜まるんだ？」

「えっと……満足にご飯を食べられる状態で、その……1ヶ月になります」

「1ヶ月う！？」

そのあまりにも長い期間に伊月は思わず大きな声を出してしまった。どんなに大きな魔術を使っても1日あればすぐに戻るというのに、それほどかかる魔術とは本当にどれだけの魔力を使っているのだろうか。

シアは驚いた猫のように体をびくう！と大きく震わせて、途端に透き通るような蒼の瞳に透明の雫を貯め始めた。

「ご、ごめんなさい。迷惑ですよ……鬱陶しいですよ……」

「あ、いや……」

どうやら伊月の反応をいつまでも長くいる気がよこの野郎という風に感じてしまったようだ。慌ててそのイメージを消そうとする。

「いや、シアが迷惑とかそんなんじゃないから！むしろお前がいてくれた方が気持ち的には落ち着くかなって！」

「え……？」

「ほら俺って1人暮らしだし、友達もいないし！だから誰か気兼ねなく話せる人っていうのは欲しいから！」

何か自分で虚しいことを言っているが、事実だしこの際気にして

いられない。

シアはこぼれ出しそうだった涙を拭い、呆然とした顔で伊月を見ていた。数秒見つめ合い、突然シアがふっ、と口元を抑えて笑い出した。

「……笑われると心外だ」

「ふふっ、ごめんなさい。けれどおかしくて」

そこまで必死に訴える姿が滑稽だったのだろうか。ダイニングに鏡などあるわけなので伊月には知る術がない。

だがまあ、シアが涙を引っ込めてくれたのならそれもいいだろう。伊月も彼女に返すように、苦笑いを漏らした。

背にもたれ、考える。シアのこと、機関のこと。魔術のことと不安な要素が多すぎた。思いに思いを巡らせ、結論に結びつく。

取り急ぎ、シアのことを優先にしようと思った。

だからこそ言わなければならぬことがあり、伊月は体を起こした。

「シア。はっきり言ってお前は常に狙われている。お前が1人でいたらおそらくすぐに敵は行動に移すだろう。だからお前はずっとこの家にいてもらいたい。少しでも敵の目を遮断するために」

「……はい」

「明日からは俺もこの部屋に残っているからさ」

「……学校は大丈夫なんですか？」

「それでお前がさらわれたらどうしようもないだろ」

そんなことが起きたら一生後悔する。

「……重ね重ね迷惑をかけてしまいですみません」

「気にするな。俺がしたいと思ってすることだ」

目を伏せて謝罪の言葉を口にするシアに手を振って否定する。別に学校へ行ったところで楽しいことがあるわけなので、本当に何も言うようなことはないのだ。

「だから、まあ1ヶ月は頑張ろうな」

「……はい」

シアは笑顔を浮かべた。まるでそれは、荒れ地に咲いた一輪の花のようで、健気さの中に凜とした部分もあつて、

「では、改めてよろしくお願いします」

「あ、ああ。よろしくな」

不覚にもその笑顔にときめいたのは内緒にしておこう。

7章 襲撃の胎動

夜の帳が下り、月の光が格子の間から差す。皐月は一人、武道場にいた。

北城家にある武道場はそこらの学校のものより断然広い。設備もなかなかなもので、週に二三回実際に剣道を教えているほどだ。

そののやや端のほうで正座をしながら、彼女は瞑想をしていた。

「……」

いろいろとある雑念を消去し、唯無の海に浮かんでいるような感覚になる。その気持ちを保ちながら、皐月は腰に差した刀の柄を握りしめた。

音を生まない無風の空間。

「……せあ！」

そこを切り裂くように、皐月は神速の勢いで刀を振り払った。刀の切った後を補うかのように空気が唸る。あまりの速さに残像が見えたほどだ。

居合い。

鞘に入れたままで相手を油断させ、一撃で仕留めるか迫る攻撃を返して二の太刀でとどめを刺す刀の武術だ。

皐月は振り切った刀を鞘に収め、感想を呟く。

「……まだ」

まだ足りない。兄を超えるにはまだ、遅い。

かつて、そう遠くない昔のこと。10歳の頃に魔術を使える体ではないと兄が宣告されてから2年経ったころの話だ。

その頃の伊月の待遇はもう最悪だった。父からは暴力を受け、母からは下等生物を見るような目で見られ、使用人からさえも目下の視線を浴びてきた。12歳になったら一人で生きていくように言われていた。いわゆる勘当だ。

そして出て行く前日、伊月は皐月の目の前に現れて言った。

『勝負しろ。ここで、北城の全てと断ち切る』

その頃の彼は既に分銅鎖と、魔術を吸収する意味不明な力を持っていた。

本当ならば戦いたくなかった。戦えば、それこそ何の力を持たない兄などぼろぼろになってしまふ。それでも、ある種の強い執念を持った彼の意志を蔑ろにすることも出来なかった。だから皐月は刀を抜いた。

だが……結果は皐月の負け。しかも伊月には全く傷1つつけれずに。

分銅鎖を完璧に使いこなし、人間離れした身体能力を見せつけられ、皐月の刃は届くことなく滅多打ちにされた。苦し紛れに撃った魔術も右手に吸収され、魔障壁を打ち破って体に凶悪な一撃を与える。あの右手は魔障壁も破ってしまうのだ。

手加減など全くしていない。

それでも、伊月が去るときには彼の身を案じた皐月のほうがぼろぼろになっていた。彼の背中を皐月は無理に手を伸ばすのが精一杯だった。

あれ以来、皐月は修練に力を込めている。いつか兄を見返し、

……引き戻すために。

「……ん、何？」

過去のことを思い出していると、不意に床に置いていた携帯電話が震えだした。手に取り、画面に表示されている人物を確認する。

「あの人ね」

誰だかを理解して、すぐに通話ボタンを押した。

「もしもし」

「もしもし。今日の調子はどうだった？」

スピーカーから聞こえてくるのは、優しくも大人特有の渋い声だ。皐月はいくらか身を固くしながらもそれに返事をした。

「ええ。いつも通りですね」

「それなら良かった。君の技が悪くなっていたら大変だからね」

ふふつと笑う男に皐月はそうですね、と苦笑いを浮かべながら返した。

彼の名前は佐井健一郎。皐月の『機関』の上司に当たる人だ。声の感じからするに穏やかな人に思えるが、彼には裏の顔がある。

「にしても北城は見てた？ 中庭で行っていた魔術決闘」

「はい。あれだけ騒ぎが大きければ」

「だよな。僕も理事長室から覗いていたんだよ」

そしてまた、彼は学園の理事長も務めているのだ。はつきり言つて彼に逆らう真似は皐月には出来なかった。

「しかし、あれだね。やっぱり君の兄は危険すぎるね」

「……ですね」

佐井は伊月のことを知っている。魔力を持たないことや、使っている武器、さらにその魔術を消す右手の真相まで。それを知った上で、今日起きた氷系魔術師筆頭を圧倒した力を見せつけられたら凄いを乗り越して危険になる。筆頭が負けることがまずあり得ないからだ。

「そういえば日比野先輩はどうなりました？」

「あれじゃあね……まず脊椎骨折に内臓破裂。その上ひどい脳しんとうを起こしているらしく生きていても後遺症が残るのは避けられないかも。……馬鹿にはお似合いだけどね」

「生きていても？ まだ重体ですか？」

「そうだね。よくまああの一撃を受けて即死にならなかったとは思っよ」

それは違う、と皐月は思う。

あれはどう考えても手加減をしていた。伊月の＜爆華術＞は、その気になれば鉄でさえ簡単に貫けるのだから。

「訴訟は？」

「どう考えてもあちらが悪いでしょ。権利乱用に最上級魔術の使用。もし君の兄じゃなかったら確実に死んでるよ」

確かに、と皐月は頷いた。

「しかもこれの件は他にも何件があるからね」

「え……他にも？」

「うん。何故かそれをあほな教師が隠匿していたんだけどさ。とりあえずその人は懲戒免職処分にした。少なからず怪我を負った人もいて、あの傲慢野郎を擁護する人はほとんどいないよ」

所々に悪罵が混ざっていることに皐月は不快そうに目を細めた。

この佐井という人間の悪いところは、人を見下す発言が多いことだ。その上必要ない人間は即座に切り捨てる。そんな冷酷さまで持っていた。

だが、今回に限っては間違っていないと思うので気にしないことにした。

「あ、脱線しちゃった。本題に入るよ」

「すみません。私のせいで」

「気にしないで。そうだね……君は銀髪の少女の話って聞いている？」
「一応は」

3日前、街の外れで大きな紫色の光が発せられ、向かってみると銀髪に碧眼で数世紀前に着ていたようなドレスを身に纏う少女が発見された。

機関の人間は彼女を保護しようとしたが逃走。行方が分からなくなる内にその子が別の世界から来たという可能性が示唆された。何故その結論に至るのかは皐月にも分からない。

以来、機関が血の眼をしてまで行方を追っているという、そんな話だった。

「そういえば、今兄さんの部屋にその銀髪少女がいた気がします」

「……な！？それは本当か！？」

「間違いないでしょう。我が家が監視用に仕掛けたカメラが捉えましたから」

北城家は伊月が住む予定になった部屋に忍び込んで勝手に監視カメラをつけている。伊月が余計なことをした時にすぐ動けるようにだ。彼は何回か住居を変えたが、設置を怠ったことはない。

そのカメラに、先日に来た指名手配の少女が映っていたのだ。伊月が表では決して見せない笑顔も映って。

「そういうことは先に言ってくれないかな!? 今の僕たちにとって銀髪少女の行方は最優先事項なんだよ!？」

「すみません」

「……まあいいさ。けど厄介なことになったな。よりもよって対魔術において最強の奴と」

「肉弾戦でも勝つことは難しい。彼は間合いに入れたら即死ですからね」

何度も機関の人間が汚物と判断した伊月を暗殺しようと動いたことがある。だが、朝になって帰ってくるのは暗殺者の腹が異常にへこむか、最悪貫通した死体だ。

それに参加したことがないとはいえ、かつて戦ったことがある皐月はそのことがよく染みていた。しかも今日の戦いを見て、その動きがさらに洗練されていたことを知った。

「ねえ北城。お前なら倒せるんじゃないの？」

「それこそ、街が吹き飛ぶほどの魔術剣技を使うことになりましたが、それでも確率は半分しかありません」

「……となると誰がいいだろう……」

ああでもない、こうでもない佐井は思考を巡らす。だが伊月達を襲うことは決定事項のようで、皐月は暗い気分になるのを感じた。何故そうしなければならないのだろうか。

結局兄だつてその銀髪少女だつて人間なのに、普通じゃないから、利用価値があるからつてそうやすやすと社会の闇に屠られてしまうのか。

そんなはずがない。

だが、それを言えるほど自分の立場がないことを皐月は知っている。だから、こうして歯がみするしかない。

それがとても、悔しい。

「じゃあ一宮に行つて貰おうかな」

意見が纏まったらしい。皐月は思考を振り払った。

「一宮……梓のことですか？」

「うん。彼女ならいけるだろうし、引き受けてくれるさ」

皐月は知り合いの戦闘狂の少女を思い出す。確かに、彼女ならすぐに行くと言いそうだ。

「怪我は免れないと思いますけどね」

「そんな物は当たり前。もし死んでも換えは効くからね」

「……」

冷酷ですね、と声に出さず呟いた。

「そいじゃ。また何かあつたら連絡するよ」

「お待ちしてます」

抑揚のない声でそう言つて、皐月は通話を切った。

誰もいない武道場は、そこに無音の空間を生む。鳥の鳴き声も風音もしないここは、そこはかとなない空虚さを感じた。

皐月はその中で、一人嘆いた。

思い出すのはカメラの映像。そこにいた、伊月の笑顔。

あれを見るのは何年ぶりだろう。

彼が10歳の誕生日を迎える前、自分と伊月は暇な時間をいつも共に過ごすくらい仲が良かった。何度もその笑顔を見て、いじめてくる子から守ってくれ、励ましてくれたことさえある。伊月は皐月のあこがれだった。伊月が家を出て行かされると聞いた時は必死に反対したものだっただ。

だからあの魔術学園で4年ぶりに再び出会った時にはもう涙が出て来るくらいだった。そしてすぐに駆けつけようとした。

そこで、全てが変わったことを悟った。

伊月は誰かを拒絶し、北城という名を嫌い、皐月を妹と見ていない。無理に近づきさえすればすさまじい殺気を放つぐらいに。

何もかも、壊れた。誰もが当たり前に持つ魔術のせいだ。

「兄さん……」

皐月は携帯を握りしめて、格子から外を眺めた。

夜空に浮かぶ半分弱欠けた月は幻想的で、心が締め付けるように
儚げな光を落としていた。「もう私たち……戻れないの？」
月に語る少女の言葉は、虚しく消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4336y/>

Unchain

2011年12月29日23時54分発行